

◎ 令和2年度 ◎

東京都小学校特別活動研究会

研究発表大会

令和2年度東京都小学校特別活動研究会の研究大会が、去る2月16日(火)に小平市福祉会館市民ホールを会場として開催された。本研究会では、コロナ禍の中「よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かす特別活動」を研究主題に研究を進めてきた。今年度はその1年目として、研究の基調報告を受け、学級活動部、児童会活動部、クラブ活動部、学校行事部の4つの部会が研究を進めてきた。

研究発表大会の概要は、次の通りである。

研究への情熱を確認し合った大会

今回は、新型コロナウイルス感染症予防の観点から、東京都内の教員で事前申し込みをしたおよそ110名が参加した。コロナ禍の中、学習指導要領の三つのキーワードの育成に向けて、特別活動が担う役割への期待の大きさを感じられる大会となった。

大会は、開会の言葉に続き、木田会長から次のような挨拶があった。

冒頭昨年度の研究を振り返り、これまでの研究は、特別活動で育成する資質・能力を育てるためのものであったことを確認した。

コロナ禍において、改めて児童にとって人との関わりが重要であり、「なすことによって学ぶ」という特別活動の果たすべき役割の重要性を確認した。

また、本会が今年度新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から定例会や部会の方法を工夫するとともにホームページの充実を図ってきたことを紹介した。

そして、本日の講師の安部恭子先生の講演から学んだことを参会者が各区市町村で実践し発信していくことの重要性を語った。また、日頃より支援していただいている都ならびに各市区町村教育委員会、理事の先生方、各研究団体の代表を務めている諸先生方に対して感謝の意を伝え、今回の研究発表大会開催にご尽力いただいた小平市教育委員会への御礼で挨拶を結んだ。

続いて、ご多用の中ご列席いただいた来賓・顧問の先生方のご紹介の後、氣田研究部長より研究基調報告がされた。続いて、各活動部がそれぞれの創意工夫を凝らして1年間の研究内容や成果・課題の発表を行った。(詳細は、2・3ページ参照)

最後に、文部科学省初等中等教育局教科調査官安部恭子先生から指導講評と『これからの時代に期待される特別活動』との演題で講演いただいた。これからの時代に即応した学習指導要領のポイントや指導の充実に向けた多くのご示唆をいただいた。(詳細は、4ページ参照)



会長 木田 明男
(小平市立小平第三小学校長)

都小特活

第108号

東京都小学校特別活動研究会

令和3年3月発行

発行人
木田 明男

研究発表大会次第

- | | |
|------------|--|
| | 進行 庶務部長 今田 喜紀 |
| (1) 開会の言葉 | 副会長 秋山 美栄子 |
| (2) 挨拶 | 会長 木田 明男 |
| (3) 来賓挨拶 | 小平市教育委員会 教育長 古川 正之様
教育指導担当部長 国富 尊様
東京都教職員研修センター
指導主事 関 聡 司様
(代読 副会長 新井 正一) |
| (4) 来賓紹介 | 副会長 岡野 範嗣 |
| (5) 基調報告 | 研究部長 氣田 眞由美 |
| (6) 研究発表 | 司会 研究副部長 篠 遠 信 行 |
| | ○学級活動部
「よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かす学級活動」 |
| | ○児童会活動部
「よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かす児童会活動」 |
| | ○クラブ活動部
「よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かすクラブ活動」 |
| | ○学校行事部
「よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かす学校行事」 |
| (7) 講演 | 『これからの時代に期待される特別活動』
文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
安部 恭子 先生 |
| (8) 閉会のことば | 副会長 伊藤 幸一 |

◎ 学級活動部 ◎

『よりよい人間関係や生活をつくり、 自己のよさを生かす学級活動』

1 発表者

- 大野和代 指導教諭 (足立区立千寿第八小)
- 奥山優子 主任教諭 (中央区立月島第三小)
- 関原良平 教諭 (江戸川区立第七葛西小)
- 土屋菜々子 教諭 (中央区立月島第二小)

2 研究発表

(1) 主題設定の理由

新学習指導要領には、「学級生活の充実と向上を目指し、他者と協力したり、個人として努力したりしながら、自主的・実践的に取り組むことにより、活動することの楽しさや達成感・達成感を得たり、自己有用感を高めたりすることにつながる。」とある。今年度より全教科で全面实施となった新学習指導要領の改訂では、特別活動がこれまで教育課程上果たしてきた役割を踏まえて、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の3つを視点としつつ、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3点の柱に沿って、資質・能力が整理されている。

本研究会の主題である「よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かす特別活動」を受け、学級活動部では、「自己のよさを生かす」とは、自分の興味のあることや自信のあることが分かること、自分の興味があることや自信のあることを行い、友達や学級に貢献すること、また、自分の思いや願いを叶えられること、学級の中に自分の居場所や役割があることと捉えた。

学級活動においては、学級という集団の中で、様々な問題を自分たちで見付け、解決方法について話し合い、合意形成を図る。そして、合意形成したことをもとに実践し、解決につなげていく中で、自他のよさや可能性を広げたり、活動することへの達成感や充実感を得たり、自己有用感を感じたりすることができる。

そして、その経験の積み重ねが生涯にわたって、集団や社会の一員として、また社会の形成者として、たくましく生き抜く資質や能力へと

つながる。

主題を設定して1年目となる今年度は、学級活動における「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」を捉え直し、本時の活動(解決方法の話し合い・解決方法の決定)における児童の言動を具体的に価値付けていくとともに、また、評価規準を見直し、指導の充実や指導と評価の一体化を図っていく。

- 視点1「みんなとともに生きていく力を育てる指導の工夫(人間関係形成)」
- 視点2「よりよい集団をつくらうとする力を育てる指導の工夫(社会参画)」
- 視点3「なりたいたい自分に向けてがんばる力を育てる指導の工夫(自己実現)」

(2) 研究の視点

- ①学級の全員が納得する合意形成の工夫
- ②「学級の目標」の可視化と実践への工夫
- ③活動のよさを認め、価値付ける終末の助言の工夫
- ④個々の活動を価値付けたカード作成と可視化の工夫
- ⑤「振り返り」の時間や、振り返りカードの工夫
- ⑥自分や学級全体の成長に気付く振り返りの工夫
- ⑦計画委員会を活性化させる指導の工夫
- ⑧発達段階による「捉えておきたい『学級会』の観点」などによる実態把握の工夫
- ⑨前回の学級会を踏まえた、次回の目標設定の指導の工夫
- ⑩実践活動において、自分や仲間のよさを実感し、自分を見つめ直す工夫

3 研究を振り返って

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、部会や研究授業を行うことができず大変残念であった。しかし、各自の実践を見直す時間を要し、報告し合い、それを学級に持ち帰ることで、コロナ禍でも豊かな学級活動を実践することができた。

どの学級の学級会でも「やれない」ではなく、「工夫して行う」ことを、常に児童は話し合っている。ウイズコロナの時代の中、「やれない」ではなく、「工夫して行う研究」を今後も実践していきたい。

また来年度は、多くの部員と共に更なる研究を深めていきたい。



◎ 児童会活動部 ◎

『よりよい人間関係や生活をつくり、 自己のよさを生かす児童会活動』

1 発表者

- 渋井洋子 指導教諭 (東久留米市立南町小)
- 星野良明 主任教諭 (江東区立香取小)
- 大蔵久美 指導教諭 (小平市立小平第六小)

2 研究発表

(1) 研究内容

これまで児童会活動部で捉えてきた「人間関係」「社会参画(自己有用感)」「自己実現」は以下の通りである。

人間関係

よりよい人間関係を築くために、児童会活動部では「上級生は下級生に対して思いやりの気持ちをもって接し、下級生は上級生にあこがれの気持ちを抱いて協力できる」ような、異年齢集団活動を通して、他の学年との人間関係を豊かに形成する力を付けることが必要であると考えた。このことは、児童の発意・発想を生かした活動に参画していくことで身に付けていくことができる。

社会参画(自己有用感)

「『自分は必要とされている』『自分は役に立っている』と思える感情」と定義し、それは他者に認められてはじめて得られるものであると考えた。このことは、上述の「人間関係」を豊かにすることと関連が深い。

自己実現

「異年齢交流活動の中で、『自分のなりたいたい姿』を目指して、全校のみんなのために、その活動の目的や意義を達成していくこと」と捉えた。このことは、上述の「社会参画」していく活動を通して、実現していくものと考えた。

新主題を設定して1年目となる今年度は、児童会活動部における

「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」を振り返り、手だてを整理し直すことで、三つの視点がそれぞれどのように「よりよい人間関係や生活をつくり自己のよさを生かす児童会活動」につながっているのかを再確認していく。

(2) 研究の視点

- 視点1「異年齢の人間関係を高める力を育てる指導の工夫(人間関係形成)」
- 視点2「学校生活をよりよくしようとする力を育てる指導の工夫(社会参画)」
- 視点3「異年齢集団活動の目的や意義を達成する力を育てる指導の工夫(自己実現)」

3 研究の振り返り

年度当初の委員会活動でオリエンテーションを行うことや、計画から振り返りまでの一連の活動を継続すること、発意・発想を生かした活動の場を保障することで、「全校のみんなのために」という目的や意義を達成する活動につながる事が再確認された。

また、自己実現のベースとなる「あこがれ」と「思いやり」を可視化することを通して、相手意識が育ち、自己有用感の高まりやさらなる活動への意欲につながる事が再確認された。

(来年度に向けて)

あこがれの気持ちや自己有用感をベースとして、次の自分の姿(なりたいたい姿)に近付こうとしている児童の様相をどのように見取っていくか、また、あこがれや自己有用感以外の自己実現のベースとなる意欲とは何かを探っていく。

更に、基本的な代表委員会や委員会活動の在り方(「児童の発意・発想を生かした活動」の場を保障すること、「計画」から「振り返り」までの活動を一連の活動として捉えること)についてさらに見直し、より多くの学校に広めていく。



◎ クラブ活動部 ◎

『よりよい人間関係や生活をつくり、 自己のよさを生かすクラブ活動』

1 発表者

島田 泰子 教諭 (墨田区立曳舟小)
梶井 綾 主任教諭 (目黒区立八雲小)
大月 香織 教諭 (足立区立古千谷小)

2 研究発表

(1) 研究内容

クラブ活動は、異年齢集団活動の楽しさを味わい自分たちの手で活動を作り出すための方法の理解、人間関係をよりよく構築していくための相手を意識した思考力、多様な仲間の個性を受け入れ助け合ったり協力し合ったりして、よりよい人間関係を築こうとする態度といった、資質・能力を育てることができると考える。

また、自他のよさや頑張り気付く中で異年齢の人間関係を育み、自分たちのクラブ活動をよりよくするための課題を解決しながら、自分のよさや可能性を将来にわたって追求しようとする態度を育む。これらの一連の活動の中では、自己肯定感や自己有用感の高まりが期待できる。

新主題を設定して1年目となる今年度は、これまでの研究で積み重ねてきた、毎時間及び年間の活動がよりよく展開されるよう指導の充実を図ることで、クラブ活動における「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」を捉え直し、手だての有効性を検証した。また、評価規準を見直し、指導の充実や、指導と評価の一体化を図った。

視点1 「みんなとともに生きていく力を育てる指導の工夫 (人間関係形成)」

視点2 「よりよい集団をつくろうとする力を育てる指導の工夫 (社会参画)」

視点3 「なりたい自分に向けてがんばる力を育てる指導の工夫 (自己実現)」

(2) 3つの視点の有効な手だて

視点1 (1)目標とめあてのつながりを意識した自己評価
(2)いいねカードの取組 (3)クラブ通信の活用

視点2 (1)計画委員会 (2)クラブファイル (3)活動計画カード

視点3 (1)クラブ成長カードを活用した目標の決定

(2)「なりたい自分」を意識したオリジナルのクラブ名

(3)4年生から6年生までが楽しめるルールの工夫

(4)目標に近付くためのオリジナルルールブックの作成

3 研究を振り返って

・クラブ活動の特質の一つは「異年齢集団活動」である。クラブ活動で人間関係形成を図るためには、活動の特質にあった「異年齢集団『小』集団活動」を展開することが重要である。また、限られた活動時間の中で、仲間のよさに気付くためには、振り返りの時間に「よいところ見付け」を設定するとともに、個々が見付けた「仲間のよさ」を広げる時間を設定することが有効である。

・クラブ活動における社会参画力を高めるためには、企画・進行を担う「司会グループ」を輪番制で行うことが有効である。また、計画委員会を効果的かつ効率的に行うために、「活動計画カード」を用いて、事前に計画する点を明確にする。

・クラブ活動で自己実現を図るためには、目指す姿が必要である。そのために、年度初めに「クラブ活動を通してどんなことができるようになるか」を明確にしておく。また、「自分の選んだクラブをどんなクラブにしたいか」を考え、所属児童全員の願いのこもった「〇〇クラブ全体の目標」を決めることが有効である。

・クラブ活動で育成を目指す資質・能力を3つの視点で捉え直したとき、3つの視点「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」とクラブ活動の特質である「異年齢集団活動」や「同好の仲間」「個性の伸長」を関連付けて指導していくことが必要であることが明らかとなった。次年度は、実践を通してクラブ活動で育成を目指す資質・能力を追究していくとともに、今年度作成した評価資料も活用していく。



◎ 学校行事部 ◎

『よりよい人間関係や生活をつくり、 自己のよさを生かす学校行事』

1 発表者

平山 かおり 主任教諭 (目黒区立鷹番小)
松本 明子 主任教諭 (北区立浮間小)
檜山 真理子 主任教諭 (足立区立舎人第一小)
竹田 桃子 教諭 (練馬区立上石神井北小)

2 研究発表

(1) 研究内容

学校行事には、みんなで力を合わせて、集団の力やよさをより高め、自分や集団の成長を実感できる場が多くある。それらを実現する児童の育成を目指すために、まずは児童が今の自分を理解することが大切である。学級や学年、学校という集団の中で今の自分にできることを考え、めあてをもって行事に取り組んでいく中で、自分の役割を果たしたり、よさを見付け合ったりして、新たな自分に気付き、新たな可能性を見出すことができる。一つの行事を通して得られる達成感や充実感によって、さらなる高みを目指したいという自信や希望につなげることができる。

新たな研究主題での一年目となった令和元年度は、「なりたい自分になる」とはどういうことか、「なりたい自分」に近づくための資質・能力とは何かを明確にすることから研究を始めた。これまでの研究で積み重ねてきたものを大切にしながら、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」を相互に関連付けて実践し、学校行事で育成する資質・能力を明らかにしていきたい。

(2) 研究の視点 (実践事例)

視点1 「みんなとともに生きていく力を育てる指導の工夫 (人間関係形成)」

【遠足】(1年生)「みんななかよし はじめてのえんそく」

視点2 「よりよい集団をつくろうとする力を育てる指導の工夫

(社会参画)」

【学習発表会】(3年生)「79の声で届けよう! つたえよう! つなげよう!」

視点3 「なりたい自分に向けてがんばる力を育てる指導の工夫 (自己実現)」

【音楽会】(4年生)「音楽会でついた力を生かそう大作戦!」

感染症防止対策の工夫

【学年体育発表会】(4年生)「つながれ! 108人! Go For It!」

3 研究の成果と今後の課題

(成果)

・コロナ禍でできる行事とできない行事を整理することで既存の行事ではなく「今年しかできない取り組み」について深く考える機会をもつことができ、独自の工夫をして学校行事に取り組むことができた。

・仲間に思いを伝えるために掲示物の工夫をしたり、ICT機器を活用したりすることで学年、学校全体で思いを共有することの大切さを再認識することができた。

・事前・事後指導においても、人間関係に重点をおいた手だてを考え実践することができた。

(課題)

・実現できない行事も多く、そこで児童に付けたい力を育む機会が少なくなってしまうため、それを補うための活動をさらに考えていく必要がある。

・人と関わる機会が減ったことにより、人と関わるのが苦手な児童が、さらに受け身になってしまう傾向があるため、自己のよさを生かして、みんなとともに生きていこうとする力を育てる声掛けや工夫が必要である。



都小特活研究発表大会記念講演

講演／「これからの時代に期待される特別活動
より良い人間関係や生活をつくり、
自己の良さや可能性を發揮して生きる」

講師／文部科学省初等中等教育局 教育課程課
教科調査官 安部 恭子 先生

新型コロナウイルス感染症流行下において、先の見通せないこれからの時代は、学校が学校である価値は一体何なのかを一人一人が、今一度問い直して欲しい。子供たち同士が自ら関わり合って、よりよい生活やよりよい人間関係をつくり、学び合って欲しい。さらに、自分らしさや自分のよさを生かして、自分らしく生きていくということが求められる時代である。東京都小学校特別活動研究会の研究主題「よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かす特別活動」は、これからの時代にふさわしい研究主題であった。4つの部会が、何に向かって研究に取り組んでいるか、手だてに統一性があり、どんな子供たちを育てていきたいのか明確な研究であった。



「コロナ禍での特別活動」

今年度は、学校が止まってしまうという状況になった。学校教育ならではの学びを大事にしなが、子供同士の関わり合いや子供たちがお互いに励まし合って成長していけるようにし、友達の考えを聞いて自分の考えを確かなものにしていくことで、子供たちの自信につながっていくのではないかと。話すだけではなく、話し合う。学ぶではなく学び合うことを意識して学びの保証を行うことが重要である。さらに、学校でなければできない学習活動、家庭で補うことができる学習活動を明確にして、学校と家庭のどちらで行うことがふさわしいかを意識して指導計画を作成する。特別活動は、各学校で創意工夫して実践するものである。学級活動は、先生と子供の信頼関係、子供同士のよりよい人間関係、学級経営や学びの基盤を作るものだ。今後、このような状況下で見通しがもてない中だからこそ、指導計画、年間計画を学校によって創意工夫して検討して行うようにする。特別活動を基盤に学校を立て直した学校は、朝の時間に係活動の時間を設定したり、話し合いを行ったりする取組を行っている。ロングの休み時間を設けて、異年齢で遊ぶ取組も行っている。学級活動、児童会活動、クラブ活動、行事を相互で工夫し、実践して子供たちの力を付けるように積み重ねていくことが大切である。

低学年のうちから、みんなで話し合っ、みんなで決まる活動を取り入れていくことで、低学年の子供たち提案の学校イメージキャラクターのアイデアが生まれた学校がある。学校をみんなで楽しくしたいという気持ちを低学年のうちから育てていくことに価値がある。お兄さんお姉さんへの憧れの気持ちが、子供たちの次への意欲につながるだろう。下学年から尊敬されたり、ありがとうと言われたりすることで高学年の自信につながっていくはずである。

「ICTを活用した特別活動」

タブレット端末が一人一台貸与される時代に突入した。特別活動は、為すことよって学ぶ直接体験が基本である。ICTの機材を活用するためだけの学習活動にならないように留意する。何のためにICTを使うのかをしっかりと考えて、学習課程の中で効果的に使用する。また、特別活動の目標や内容に合うかどうか検討して使用することも重要である。タブレット端末を使用することで、分類整理等が容易にできる場合もあるが、子供たちに分類整理する力を育むことも忘れてはならない。

「特別活動で育成する力と他教科との関連」

日本の教育の特徴とも言える特別活動が子供たちの円滑な人格の成長につながる。海外では、先生が授業だけ教える場合が多い。日本では、学校生活全てを学びの場として捉えている。掃除、給食の時間が最も学級の実態が見える場面であると言われることがある。その時お互いのことを思い合っ活動すること、学級や班で協力すること、学校のことを考えて行動できるかどうか特別活動の力である。

教師と子供、子供同士の関わり合いを大事にして、学級経営を充実させて欲しい。子供同士が違いを認め合っ、他者の意見を尊重して、

みんなでよりよいものを作っいき、よりよい未来を築くことができる資質能力を育んでいっ欲しい。今まで経験したことがない状況だからこそできないからやらないではなく、どうしたらできるのかを考えて取り組んでほしい。先生が考えて子供たちに指示するだけでなく、自分たちが主体的に取り組むからこそ、学びを深めていくことができる。それが子供たちの実践力を深めていくことにつながっていく。

特別活動で付けた力は、各教科の学びの中で生かすことができる。特別活動の充実が主体的・対話的で深い学びに向かう教科指導の授業改善につながっていく。対話的でない主体的でない特別活動はない。汎用的ではない特別活動もない。何のための話し合いなのか、目的意識をしっかりと明確にして話し合い、実践して、振り返りを生かすことが大切である。さらに、これまでの経験を想起して、自分たちの生活をより良くしていけるようにすることで、他教科でも活用できる力が身に付くであろう。

学級活動(1)(2)(3)の特質をふまえて指導する。相手を尊重できるような学級経営の基盤ができていないとよりよい合意形成には至らない。そして、多数決が最終決定になり得ることもあるが、決まったからには、みんなが協力するというを最初に指導しておく必要がある。自分が賛成した意見には決まらなかったけれど、協力してやってみたら良かったと思えること、みんなで活動することは大事だと子供が発言を転換できるように指導を重ねる。学級会ノートに子供が何を記述したのか、ちゃんと前向きに自分のやることを書いていっているのかをしっかりと見取り評価することも大切である

「キャリア教育とキャリアパスポート」

キャリア教育においては、特別活動は学習指導要領の総則でキャリア教育の要として示された。職場体験や夢について語る取組、地域の大人に話を聞く活動だけに終始してはならない。現在は、入りたい会社に入れるとは限らない。その会社が存続するとも限らない。さらには、入りたい部署に所属できるとは限らない。大事な、自分が与えられた場でどう前向きに頑張っいけるか、職場の人々と同じ方向を向いて取り組んでいけるかが大切である。そのために、児童会活動では、学校生活をよりよくするために、みんなのために仕事をしなければならない。しかし、やらされている仕事だけでは、子供たちは何も学ぶことができない。自発的に自治的にどうすれば良いか考えられる子を育てたい。子供たち自身が自分の良さや、大人になったらこういうことが大事だと学べるようにする。学ぶことと自己の将来をつなげて取り組めるように支援していくことが求められている。日本の子供は、学力も高い、学歴も高いにもかかわらずノートが多いのが現状である。学んでいることが将来の仕事につながっていないのかもしれない。今学んでいることが将来につながるのぞという意識が低い。今学んでいることが、自分の将来につながっていると意識させる必要がある。勉強することが楽しい、学んだことを生かして将来の仕事に就きたいという意識も同様に低い。学んでいることと自己の将来を見通しながら、特別活動を要として、キャリア教育の充実を図っいっ欲しい。

キャリアパスポートは、子供たちの活動を記録し蓄積して、その資料を活用して指導していくことが重要である。キャリアパスポートを書くだけの時間に終始してはいけな。最も大事なことは、学びをつないでいくことである。子供たちが書くことによって、先生が目にしな場所での頑張りや活躍する子供の姿をキャリアパスポートの記述で先生方や家庭に知ってもらい、その記録を次の指導に生かすことが大切である。小学校の場合には、記録を用いて話し合っ意思決定する。学級活動の振り返りシートや掲示物やワークシートは全て基礎資料になる。それらの基礎資料を一部取捨選択してファイルに入れる。子供たち自身が自分の成長や頑張りを自覚できるような活動を経験させて、未来につなげていっ欲しいと願っている。

お互いを尊重し合っ、ともに生きていける子供たちを皆さんと一緒に育てていきたい。そのためには、先生方が一番のモデルである。笑顔で、辛いことがあっても一人で抱え込まずにネットワークを大切にっして、子供と共に笑顔あふれる楽しい学級で学校生活をこれから作っ欲しい。前向きに頑張れる子を育てていっきましょう。これからも一緒に頑張っいっきましょう。ありがとうございました。

編 集 後 記

会報108号をお届けします。校務ご多用のところ、ご協力いただきありがとうございました。(石田、浅野、酒井、藤井、梶原、伊勢、伊藤、関田)